

# 第九回むかしのくらし展「くらしの道具」

並木 晴香

新潟市歴史博物館では、開館以来、毎年「むかしのくらし展」を開催しています。これは小学校の社会科の単元にあわせたもので、子どもたちに昔のくらしの知恵や工夫、使用していた道具などを学んでもらうことを目的としています。毎年違ったテーマを設定しており、第九回目の今回は、くらしの基本的な道具に焦点をあてました。

人々のくらしには、生活の基本となる衣食住の道具や生活にゆとりを与える道具など、いつの時代も様々な道具が関わっています。それらは、時代や生活スタイルの変化によって、次第に移り変わってきました。なかでも明治以降に訪れた西洋化の波や戦争による荒廃と復興、そして昭和三十年代頃からの高度経済成長は、くらしの道具にも多くの影響



を与えました。今回のむかしのくらし展では、明治時代から昭和四十年代頃までの基本的なくらしの道具に注目し、現在の身の回りにある道具との違いや共通点、そして変化した生活スタイルを紹介しています。本稿では、展覧会の構成に基づいて道具の変化の概要をみていきます。

着るものに関する道具のなかで特に注目すべきものは、洋装化にともなう道具の変化と、高度経済成長期からの電気洗濯機の普及です。洋服の着用は明治以降少しずつ広まってきたいき、昭和三十年代頃にはほとんどの人が洋服を着るようになり、洗濯板とたたらいを使った洗濯は、「三種の神器」のひとつである電気洗濯機の普及によって見かけなくなりました。それにともなう、衣桁や衣紋掛けといった和服に関わる道具が日常的には使われなくなってきた。また、洗濯板とたたらいを使った洗濯は、「三種の神器」のひとつである電気洗濯機の普及によって見かけなくなりました。

食べることに関係する道具は、調理をするためのもの・食事をするためのもの・食べ物を保存するためのものなど様々な種類があります。その中で特に大きく変化したものは、ガスや電気の普及によって見られなくなった「かまど」とそれに関連する調理道具です。かまどが家から姿を消した理由には、土間を設けなくなった住宅環境も挙げることができ、ガスや電気が一般の家庭にも普及し、ガスステープルや電気調理器が日常的に使用されるようになったことが一番の理由に挙げられます。かまどが使われなくなったことにより、かまどに火をおこすための火吹き竹や洪扇、炭火を移動させるための十能、炭火を消すための火消しつぼなども、くらしの道具としての役割を終えていきました。ご飯を炊いていた羽釜はガス炊飯器、電気炊飯器へと姿を変え、現在も高機能化が進んでいます。また、電気冷蔵庫が普及して氷冷蔵庫が使われなくなり、調理した食品を冷蔵庫に入れるようになったため、罌帳も見かけなくなり、一方で、包丁やまな板、すり鉢などの調理道具は、その素材が多様化したものの、現在でも変わらず使われています。食事をするための皿や箸、湯のみといった道具も同様で、人々の生活スタイルが変化しても、私たちの身近な道具となっています。

住まいに関する道具もいろいろな用途のものがあります。代表的なものとして暖房器具や照明道具があげられます。これらも、家族のあり方や住宅環境、生活水準の変化にあわせて様々に移り変わってきました。ガスや電気が普及するまでは、炭火を使った炬燵や行火、火鉢などを使ってあかりをとったりしていましたが、次第に電気を使った道具へと変化していきました。このほかにも、ガラス製のハエトリやダイヤル式の黒電話など、少し前までは当たり前にくらしの中にあった道具も、多くが姿を消しました。

今回の「くらしの道具」では、葉箱や、懐中電灯の前身であるガンドウなどの安心・安全面から使われてきたもの、ラジオやテレビなど余暇の楽しみや情報を得るために現在も使われているものなど、衣食住に関わるもの以外の道具も紹介しています。それらの道具は、変化をしながら様々なかたちで現在も私たちのくらしの中にあります。

本展は、実際にこれらの道具を使われていた方には懐かしく、子どもたちにとっては、はじめての道具に出会う機会となると思います。ぜひご家族でいろいろな話をしながらご覧ください。なお、今回のくらし展は企画展示室ではなく、たいけんのひろばで開催しております。  
(なみき はるか 学芸員)

## 常設展示室から クズワラ

蒲原の平野部農村では、松葉やヨシのほか身の回りの可燃性のある植物を組み合わせ、料理や暖房などに必要な燃料としてきました。クズワラも燃料として利用されました。すぐ燃え尽き、煙も出るので良い燃料とはいえませんが、稲作の副産物であるワラはこの農村部では非常に入手しやすい素材でした。

クズワラとは、ワラを利用する過程で残った、切れ切れのワラの葉を集めたものです。ワラの利用は、まず根刈りでイネを収穫し、イナコキをしてモミを外すことから始まります。この根刈り・脱穀という二つの作業によって、ワラの利用が可能になります。次に、ワラスグリをしてワラの稈から葉(ハカマ)を取り外します。

ワラの葉は、保温性がよく、稈を取り去ったことでふわりと柔らかい性質を持ちます。この性質を生かして、ワラの葉を木綿の布団皮に詰めたものをクズブトンと呼び、敷布団として使うと大変暖かく眠ることができたそうです。他にもワラの葉は、牛馬の飼料やシキワラなどに使われ、糞尿のついたシキワラはさらに肥料として使われました。不要な切れ端を集めて燃料にする利用の仕方は、無駄なく徹底しています。

また、葉を取り外したワラの稈は、ワラウチといって横槌で叩いて、柔らかくしなやかな強さを持たせ、ワラ細工の材料として使われました。モミガラも燃料や保温材、肥料などに使われます。ワラの利用は、ワラゾウリやワラジ、ミノや背中当てなど衣料に

関わるもの、鍋敷きやオヒツチグラなどの食に関わるもの、クズブトンやワラ葺き屋根など住に関わるものまで、広く生活全般に及びました。

このようにクズワラは単なる自然物ではなく、ワラの利用の過程の中で、最終的に作り出される加工物といえます。蒲原の平野部は、今も稲作の盛んな地域ではありますが、現代の日常生活ではワラを使う機会はほとんどなく、ワラを利用するための加工の知識・技能も必要でなくなっているのです。私たちにあって、生活必需品は購入するものであって、自分で作ることは考えられないでしょう。クズワラは、収穫したイネを余すところなく利用した先人の知恵、身の回りの材料から生きるための資源をつくり出す力を伝えてくれます。

森 行人(もり ゆきひと 学芸員)



ワラスグリの様子

### おすすめの一冊

#### 新潟市の伝説

この本は合併後の新潟市内にある伝説をダイジェストで紹介したものです。伝説とは、どこの話かわからない昔話に対し、土地に根ざしたかたちで伝承されてきた口承文芸です。この本は、本館の映像で見ることのできる「黒鳥伝説」をはじめ、鳥屋野の逆竹や王瀬長者など有名な伝説からあまり知られていないものまで幅広く取り上げています。出典が明記されているので、各伝説を詳しく知りたい方にも恰好の書と云えるでしょう。

歴史研究は、紙や考古の史料だけでなく、実は伝説も参考にします。もちろん、それらが事実を伝えているとは限りませんが、伝説には当時の風習や景観が描かれており、史料に現れない社会の姿を補完することもあります。

かつての蒲原平野の様子を再現していない私などは、洞をめぐる伝説を興味深く読みました。例えば福島湯の怪火や鎌倉湯の大蛇伝説を読むと、うすうすびしく、不気味な湯の雰囲気想像されました。

突拍子もない話が多い伝説ですが、その話の背景を少し考えてみるのも一興ではないでしょうか。

(田嶋 悠佑 学芸員)



新潟市 編集 文久堂 2006年3月